

ムスメの  
いないまに

ムスメのいなくなる前に

「パパ、おはよう〜！ …あれ？」

天気がいいとそれだけで嬉しいものだけど、今日は格別！ なんととっても、みぬき初めての修学旅行！ みぬき、実は積立金が満額そろっていなかったりしたので、一時期あやうく「お金がなくて修学旅行にいけない！」ってところだったけど、なんだかパパが何らかの手段を使って、どうにかして旅行にいけるようになってくれた…らしい。

しかもおこづかいまでくれたなんて、なんかアヤシイことでもしたんじゃないのかしら？ ってあたしが邪推しても罰はあたらないと思う。パパは他人にはフツーに、頼りない子供っぽい顔でニコニコ笑ってるんだけど、ホントーはとんでもなく犯罪者っぽい…というか、犯罪者に足突つ込んでるというか、ちょっといろいろ捻じ曲がっちゃった困ったオトナのヒトだ。こんなに怖い男だって知ってたら、本当のパパもみぬきを預けるのを少

しは躊躇したんじゃないのかな、って思うくらい。「おはよう、みぬき。今日がいい天気で本当によかったね」

パパはかつてないほどにこやかだ。知らないヒトが見たら結構好青年に見えるんじゃないかと思うんだけど、あたしにはかつてないほど怪しい顔だと思えない。雲ひとつない青空に、これほど似合わない顔ってあったのかなあ？

「…気持ちわるいくらい機嫌がよくて怖いよ、パパ」

「そうかなあ？ 絶好の旅行日和じゃないか。パパがにこやかでどこが悪い？」

「うーん…なんだか納得しがたいけど…まあそれはそうとして、——なんでママがここにいるの？」

「う、うム…おはよう…」

パパの隣には、朝からものすごく不機嫌な顔をしたママが座っていた。

去年の春から福岡に単身赴任しているママが帰ってくるなんて久しぶりだ。前に帰ってきたのって

いつだったか、夏休みに一回戻ってきたときはほとんどトンボ帰りで、倉院の里で遊んでいたあたしはお昼食べただけですぐお別れしちゃったんだっけ。パパが「みぬきも大きくなったんだから、一人で行っておいで」とかニコニコしながらあたしを送り出したのはこれが理由かー!! とちよっと思つた。パパはホント、ママのことに關するものすごい悪巧みをカンタンにしちゃう大人だ。あたしにも少しはママと仲良くさせてくれてもいいじゃないの？ でもそんなこと言ったらまたあの超絶独善理論でママと仲良くするのはパパだけではないのかなとか言い出すに決まってる。

ママが帰ってきたのはたぶん夕べ、あたしが寝た後じゃないかと思う。あたしは昨日の夜は旅行の準備でワクワクしていて、普段より少し夜更かししていたのだ。

あたしの部屋は玄関のすぐ脇なので、ドアが開く音がすれば、いくらなんでも気がつくと思う。

「あー、ずっるいいい！ パパ、今回もあたしが

いないときにママと仲良くしようと思ってるんでしょー！」

「何言ってるんだ、みぬき。パパとママはもう十分に仲良くしたんだよ」

「あたしの知らないときにいつしたのー？」

「朝まで仲良くしてたのさ。だからママは寝不足なんだよ」

「夜ちゃんと寝ないと大きくなれないよ？」

「パパは十分大きくなったからいいんだよ」

「…みぬき、早く朝食を食べないと、間に合わないのではないのかね」

心底うんざりしたような顔でママが口を挟んだ。確かにママの声はかなり掠れている。ママはいつもパパと仲良くした後は声がガラガラになるみたい。いったい声が枯れるまで何してたんだろう？

歌でも歌ってたのかなあ。

「あ、そうだった！ パン焼けてる？」

「ちゃんと焼いておいたよ。牛乳も」

「うん、急がなきゃ！ 今日我真紀子ちゃんが迎

えにきてくれるんだもん！」

「そう…なのか…？」

「うん！ ママ、声平気？ またパパと仲良くしたの？」

「うー…う、うム……」

ママは目元がはれぼったい顔をしていて、今日もなんだかあんまり寝ていないみたいだった。パパはママと仲良くする時には本当に限度を知らないんだから、少しはママのお仕事を考慮してエンリヨってものをするべきじゃないかとみぬきは思うのよね！

「ママ今回はいつまいるの？ みぬきが帰ってきてからもまだいる？」

「あ、ああ…今回は、しばらくいられる……と思う……」

「そうなんだ！ じゃ、旅行のお土産話、いつばいするね！ 待ってて！」

「ああ…期待、している…時間は、いいのか…？」

「あ、うん。ごちそうさまでした！」

あたしは急いで最後のパンの一口を口に含んで、牛乳をごくごく飲んだ。歯を磨いて、髪の毛とかして、最後の点検しなくちゃ！ ああ、待ち合わせの時間が来る！

あたしは洗面所に走って行って、歯を磨いて、髪をとかした。うん、今日もあたし、可愛いし、セットもうまく決まってる！ よかったよかった。

あたしは荷物を確認して、リュックを背負って部屋を出た。ママは変わらずに座ったまま、パパはデレデレした顔をしながらママにお茶を入れたり、タオルを渡したり、本当にかいがいしい。ママも子供じゃないんだから、少しはなんかすればいいのに。

「ママ、少しは…」

そうあたしがいかけたところでチャイムがなった。あ、真紀子ちゃんが来たみたい。

「おはよう、みぬきちゃん！」

「おはよう〜！」

インターフォンから声がする。

あたしは今、ママのマンションに住んでいるので、真紀子ちゃんは一階のエントランスから先に入れない。ママのマンションは、いままで住んでいた長屋みたいな一軒屋じゃなくて、部屋に入るのになんだかいりいな手続きが必要な、広くて綺麗なおうちだった。

しかもすごい高い！（いろいろが）

いわゆる高層マンションというやつだった。

まあ、一番上は何十階あるか知らないけど、ママのおうちは地上二階なんだけどね。

ママはいつも階段しか使わないので、どんなに高くても綺麗なマンションでも階段で上れる高さにしか入居しないらしい。いつも階段をきびきび上ってくるママは確かにすごかったよくてスタイルもよくて、だらけたパパとは大違いだとは思うけど。みぬきもママを見習って階段を使って上り下りしてるんだけど、二階くらいだとエレベーター待ってるよりも早いんだよね。

鍵を開ければカンタンに部屋に入れないのは、

確かにちよつとめんどくさいけど、今度のおうちはあたしの個室がもらえたの！ だからそれでイコトにしておく。なによりママが帰ってくるおうちがあるってのはいいことだしね！

このおうちはパパいわく、「賃貸じゃなくて分譲」なのだそうだから、みぬきには初めての「あたしのおうち」なの。生まれて初めてのことなので、もうそれだけでスゴイ！ さすが公務員！

「待ってて、今降りてくから！」

あたしはそう言って、パパとママにいつてきますの挨拶をした。

パパはこの上なくほらかな顔で、ママはこの上なく憂鬱そうな顔で、あたしに手を振った。

「おかえり」

時計はすでに十二時を回っている。

最終の飛行機になんとか乗れたのは幸いだった。始発の新幹線か飛行機のどちらかにしようか直前までは迷っていた。だが、結局は自分の欲に負けしてしまったあたり、まだまだ自分は甘いものだ——と、御剣<sup>みづるさけいじ</sup>侍は思った。

高度を上げて飛行機が雲を越える。今夜はよく晴れているようで、夜景がよく見えた。だが、視界はほとんど夜の闇だった。

羽田についてからマンションまでの電車は途中でなくなってしまう。タクシーが捕まえられない最後の駅で降りて車に乗る。深夜割増のメーターをぼんやりと眺めながら、固くなっている眉間を、人差し指で揉みほぐした。

久しぶりに戻った自分のマンションは、どんどん自分以外の人間の——いや、家族の匂いで満ち

ている。ドアを開けると玄関に成歩堂が立って待っていたのには、少し驚いたのだが。

「……こんな時間まで、起きていたのか？」

「いつまでも起きてるとみぬきが寝ないからね。

一度寝たよ。さっき起きたところ。メール見たからそろそろかなって思っ、……待ってた」

「…そうか」

「おかえり」

そう言っ成歩堂<sup>なるほどう</sup>はにつこりと笑った。相変わらずその笑顔は変わりがなく、御剣はほっと肩の力を抜いた。そつと手が伸びてきて、肩を抱き寄せられる。懐かしい匂いが漂ってきて、それだけで泣きそうになった。そんなに久しぶりだったろうか、こうして彼と抱き合うのは。

「……たがいま」

「よく出来ました」

まるで子供にいうような言い回しなのは、今も少し、気になる。

「……ム。私だっ、それくらい、出来るのだぞ」

「はいはい。おなかすいてる？　なんか食べる？」

「弁当を食べてきたから食事はいい」

「そう」

「これが土産だが、冷蔵庫に入れておいてくれ」

「りよーかい」

「風呂はまだあるか？」

「火をつけなおして沸かしてる」

「そうか」

なれた手つきで成歩堂は御剣の手から土産の袋をとり、中を確認して、表示を見て冷蔵庫にしまった。土産の入っていた袋を畳んでワゴンの隙間に差し入れ、御剣の後からついていって、脱いだ上着をハンガーにかけてブラシをかける。御剣がタイをほじいたのを受け取ってこれもハンガーにかけて皺を伸ばし、カフスを外しているとベルトに手を伸ばしてきた。

「ム？」

「お風呂はいろ」

「自分で出来る」

「ボクがしたいの」

「子供ではないぞ」

「知ってるよ」

成歩堂のほうが圧倒的に手先が器用なうえ、子供の着替えで慣れているのか、御剣のベルトを外し、フックにかけ、ファスナーをおろす手際の上はさば抜けていた。膝までおろしてシャツの裾を出し、ボタンを外して肩から下ろす。

「ん——…いいにおい」

「飛行機の中が少し暑くて、汗をかいていたから…臭いぞ」

「御剣の匂いはなんでもいい匂いだよ」

「……相変わらず、キサマはおかしいぞ」

「今に始まったことじゃないでしょ」

成歩堂が御剣に特別な執着を見せるのは今に始まったことではない。そういう行為に少しばかり、優越感をくすぐられることも御剣は知っていた。

「洗濯しちゃうの、もったいないなあ」

「ちゃんとアイロンをかけておいてくれたまえ」

「もちろん」  
 シャツを引き抜いて、膝まで下ろしていたボトムを足から抜いて整えてハンガーにかけ、軽くブラッシング。その間に御剣は靴下を脱ぎ、下着一枚になっていた。

「先にお風呂行ってて」

「ああ」

ぺたぺたと足音。シャツとジャケットのポケットの中身を確認して、ハンカチを取り出す。いましがた脱いだ洗濯物を確認して、バッグを定位置に置き、成歩堂はすぐに浴室へ向かった。洗濯機にぽいぽいと服を放り込み、念のため、みぬきの部屋を覗き込めば、すでにムスメは夢の中のようだった。足元には、ばんばんに膨らんだリュックが転がっている。明日から二泊三日で、小学校の修学旅行で伊豆と箱根へ向かうのだ。それが今回の帰宅の理由でもある——子供のいない、久しぶりの逢瀬だ。

ガラスをあけると、体を洗っている御剣の背中

が見えた。後ろ手に閉めながら、肌の上のどこにも怪我や傷がないことを確認する。少し痩せたような気がするが、それはこの後でじっくりと確認すればいい。

「背中、洗おうか」

「ん…、ああ。たのむ」

ボディソープを泡立てて、ゆっくりと体を洗う。

背骨にそって少し力をこめて擦ると、御剣の口から安堵の音が漏れた。

「肩、こってるね」

「…そうだろうか…」

「疲れてる？」

「…：そうだな、…：疲れては、いる…」

反応が遅い。

あまり力を入れると肌が荒れるので、背中以外はそつと洗う。御剣はそれを止めるとは言わず、されるがままになっていた。

髪を洗うとき、少し顔を後ろにそらしているの  
 で、成歩堂からすらつとした鼻筋や顎が目に入る。

久しぶりに見るその姿に、どこか懐かしさすら感じながら、成歩堂は目を細めた。耳の下を撫でると、気持ちよさそうにうっとり目を閉じる。そんな仕草も懐かしく、いとおいしい。

二人して一緒に湯船に入った。湯は溢れる寸前でとどまり、膝のあたりをゆるく撫で回した。流石に二人で肩まで入るわけにはいかない。

「ふ——…」

深く長い御剣の吐息。力を抜いて背を成歩堂に預けると、成歩堂がそれを抱きとめた。膝が湯から出てしまうが、成歩堂はそれに湯をかけながらくるくると膝頭を撫でる。

「疲れた？」

「…：いや、…：楽になった」

「そう？」

体の力を抜いて、全身を成歩堂に寄せる——それがとても嬉しくて、髪をすく指先が少し震えた。

「…：…御剣」

「ん」

「おかえりなさい」

「…：ああ…」

耳に流し込まれる成歩堂の声に、うっとりとしながら目を閉じる姿は、妙に神々しく、久しぶりに見るせいも、新鮮で清冽だった。

「なんだかまた綺麗になったみたいだね」

「…：そんな腑向けたことを言うのはこの世でおまえくらいなものだ」

「そうかな？ 部下の人たちも、そう思ってるんじゃない？…：言えないだろうけど」

「男にそんなこと言うヤツがあるか」

「そんなことないよ。綺麗なもの、綺麗だし。御剣はいつも綺麗で、かっこよくて、素敵だよ」

「…：三十男にそんなことを言う莫迦がいるか」

少し御剣の耳が赤い。

体が温まるまで入った後で湯から出て、夜着に着替えてリビングに向かった。

髪を干しながら他愛もない話をする。みぬきの学校の話、生活の話、赴任先の話。生活の習慣も

気候も違う生活に、御剣は適応力の高さを遺憾なく發揮して、日々快適に暮らしているようだった。洗濯と掃除は完璧だが、食事はなかなか自炊することは難しいようで、しかし外食の味には不満はないようだ。時には人に食事を振舞ってもらうこともあるのだ——と話す、成歩堂は「妬けるな」と、冗談とも、本気ともとれぬ返事をした。

「狙われているんじゃないの？」

「……なにをだ？」

「女子職員とかにさ。……東京から来たエリートを捕まえて結婚しようとか思われているんじゃない？」

「その点については、最初のうちにそれとなくクギをさしておいた」

「へえ」

「生涯をともに過ごそうと誓ったパートナーがいるので、期待に沿うことは出来ない」と

「……へえ……」

「指輪でもしておくと上司に言われたぞ。職員が浮つくので、その気がないなら自衛しろ」と

ら変わりがなかった。

毎日塾に通ってる子も多いんだから、あたしがマジックをするのなんかたいしたことないですよ——そんなことを言いながら、電話の向こうで笑う声に、いとじさと同じくらいの嫉妬を感じていることを、少女は気がついてるのだろうか。

遠く離れている自分の代わりに、何もかも無くした成歩堂の近くで、彼を癒していた少女——自分が傍にいられたかったことを棚に上げて、彼女に嫉妬するのはお門違いだと、理性ではわかっている——わかっている。だが、感情は常に理性を裏切るものだ。

みぬき、と呼ぶようになってから、御剣にとってもだいぶ時間がたっていた。すでに少女は御剣にとつて、自分の娘のような存在になっているのは確かなことだ。

遠い赴任の地で、研修で滞在した異国の地で、その子供の姿を思えば、胸が温かくなることも何度もあった——それは成歩堂を思うのとは、まっ

「ふーん。相変わらずモテてるんだねえ」  
本気なのかどうなのかわからない返事をしながら、成歩堂は御剣の髪を乾かし始めた。

他の人に髪を乾かされるのは心地よいことではある。成歩堂の指先に触れられるのは、やはり特別な心地よさがある……と思いつつ、御剣はうつりと目を閉じた。

子供が旅行でいなくなることは聞いている。明日の朝、みぬきは少し怒るだろう。だが、自分が旅行が終わってもまだ家にいると答えれば、少しは機嫌が戻るだろうか——もう親と遊ぶよりも、友達と一緒に遊ぶほうが楽しい年頃だろう。

みぬきが成歩堂の養女になってから、すでに四年の月日がたっていた。最初の頃のぎこちない関係はだいぶ変わってきていて、成歩堂の若すぎる外見を除けば、親子としての体裁は整っているように見える。少女は自分の技を磨くためと、日々の生活費を稼ぐために、週に三日以上をバーでのマジックの舞台に費やしているのは、当初の頃か

たく別の感情だ。忘れていた懐かしい思い出、胸に残るかすかな子供のころの痛み——小さな窓のあかりの暖かさ、高い体温と干草の汗の匂い。

最近では会うたびに、子供から少女になっていくことにむしろこちらが驚くほどだ。同年齢の春美はすでに少女に脱皮しつつあり、たまにしか会わなくなっている現在では、その年齢特有の艶かしさに、心拍数が高まることもある。

やがて彼女もそうなるのだろうか——成歩堂の隣で——そう思うときに、それを素直に喜べない自分があることにも、御剣は自覚があった。

自分は自分が思っている以上に嫉妬深いことになり気がついたのも、成歩堂と関係を結ぶようになってからのことだ——こんなことで些細な怪気を起こすことを知られるのも恥ずかしい。

「おしまい」

ぱちんとスイッチが切られる。

ドライヤーの風にまぎれて、他愛ない考え事に意識が向いていたようだ。成歩堂が最後に御剣の

頭をそつと撫でて手を離し、ドライヤーを片付けに行った。

御剣はのろのろとソファから立ち上がり、寝室へ向かう。成歩堂の寝室として現在使っている部屋は、元から二人で使うためにダブルベッドを入れた部屋だった。室内は急いで片付けたのか、だいぶ綺麗になっている。前に一度、連絡なしに戻ってきたときはひどい荒れ様で、御剣が激怒してすぐさま部屋を片付けさせ、ベッドに入れるようになったのは三時間も後だった。

今日は綺麗にしているな——と思いながら先にベッドに入る。布団の中は成歩堂の匂いに満ちていて、目を閉じて息をした途端に、ぐつと胸が詰まってしまった。涙腺が勝手に決壊しようとしてくるのに驚き、枕に頭を乗せる。そこもまた成歩堂の熱い匂いに満ちていて、体が勝手に熱くなるのを止めることが出来ない。

「…みつるぎ？」

成歩堂が部屋に入ってきた。パタンとドアの開

まる音がすると、あとはこの部屋はただ静寂に包まれるだけになる。室内は安眠を得られるようにと、引越した当初に内装を施して防音を高めてあるため、ドアを閉めると外の音がほとんど聞こえない。勿論、室内の音も外には聞こえにくい。

成歩堂は何も言わずにそつと隣に入ってきて、身をすくめるように背を向ける御剣の、その背中に身を寄せた。首筋に顔を埋めて、深呼吸する。

「ああ……、御剣の匂いがする」

身をかえして向かいあわせになれば、御剣の頬に手を滑らせた。

「キミはいつも、……そう、言うな」

「そうかな？ 君がそう言うなら、そうかもね」

目を細めて笑う表情がやけに色っぽいものだと思いつつ、近づいてくるのに目を閉じた。

触れただけの口付けがいったん離れる。そうしてまた触れて、離れて、唇を挟まれて。

御剣はゆつくりと唇を解放して、成歩堂を誘った。すぐに欲しいものが与えられ、より深く相手

を感じようと手を伸ばす。

成歩堂は体を起こして御剣に覆いかぶさってきた——体の上に乗り上げられ、御剣はじつと成歩堂を見上げる。

「…いい？」

成歩堂の瞳は夜の色だ——そしていつも御剣の欲望を映し出し、反射して、彼の望むままのものを与えようとする。

御剣はそれに答えずにそつと目を閉じて僅かに喉をそらした。儀式のいけにえのように、刃の振り下ろされる瞬間をただじつと待つように——。

成歩堂の背がたわんで、御剣の喉に寄せられた。そうして、骨が折れそうなほど強く抱きしめられる——痛みすら覚えるその感触に、御剣は耐えていた涙がこぼれてしまうことを止められなかった。なにか悲しいわけではないのに——頬が濡れる。

ひくりと胸が震え、成歩堂が顔を上げる。

「御剣」

「な、ん、……だ」

「おかえり。…久しぶり。寂しかったよ」

「う、…ッ、……」

すぐに気がついた唇が、臉を辿って頬から耳へ動く——動物のように額をこすりつける成歩堂の動きに、御剣はやはり彼は猫のようだと思った。

少しは眠ることが出来るだろうか——自分も彼も、一度で果てることはとても思えない。少し触れられただけで体中に成歩堂が満ちて、あつという間に堰をきって溢れてしまふようなのだ。

成歩堂も同じだろう——同じだろうと思いたい。

自分が求めるのと同じほどに、彼も自分を求めてほしいと思った。

移動中に少しでも睡眠をとることが出来てよかったな——すぐに上がる呼吸の合間に、御剣はそんなことを考えた。